星ぼしに架ける橋 *The Web Between the Worlds* (1979) チャールズ・シェフィールド (山高昭訳) 早川書房 (文庫) (10／15刊・¥380)

クラーク〝最後の作品〟(では既になくなったが) の影がつきまとう長篇である。不運といえば不運な話で、それがために、ずいぶん損をしている。設定 (宇宙エレベーターの建造、主人公の経歴など) こそ似ているけれど、本質的に別の話なのだ。もっとも、〝ガジェット〟と言い切るには、宇宙に架ける橋が、物語の中心に据えられすぎているし、作者の主眼がそこにあったことも間違いはない。ただ、何が書きたかったかとなると、これはずいぶん異なってくる。

本書は、謎の追求の物語である。主人公の両親が巻き込まれ、殺された事件をめぐって、ストーリーは進展する。ホーガンの振りかざすような〝人類の謎〟みたいなハッタリのない点、ちょっと物足りないかもしれない。その分を、宇宙エレベーターの大道具や、種々雑多、さまざまな生物的、工学的〝金物〟が補うわけだ。批判する人は多いのだが、大上段のテーマが持つ臭みもなく、評者には結構たのしめた。正直いって『楽園の泉』は巨匠の完成作ではあっても、パワーが失われている。荒けずりながらのパワーの感じられる分、本書にも存在価値はあるのである。(俊)